

実りの秋です。socioでも放課後デイサービス利用の子どもたちが植えたサツマイモが収穫の時期を迎えました。小学生たちが植えたサツマイモを毎年wakabaの子ども達も掘らせてもらっています。年中・年長の集団療育を利用している子どもたちに代表して掘ってもらい、クッキングに使ったり、個別療育時にご褒美として食べたりします。大きなお芋が収穫できるか楽しみです。

お知らせ

【土曜育児相談について】

11月の相談日は11月17日の午前中の予定です。

- ① 9:00～ ② 10:00～ ③ 11:00～ (予約制です)
ご希望の方はお気軽にご連絡ください。



【集団育児利用の年長児の保護者様へ】

前回のwakabaだよりで午睡の終了時期について記載したところ、多くの年長児の保護者様より在籍園での午睡終了が近いことをお知らせいただきました。そこで、socioでの午睡も10月末をもって終了とします。11月からの年長児の生活の流れは以下になります。

- 9:30 1コマ目のトレーニング
10:00 2コマ目のトレーニング
10:30 自由遊び(休憩)
11:00 3コマ目のトレーニング (午前利用児は11時で降所)
11:30 4コマ目のトレーニング
12:00 昼食・帰りの用意
13:00～ 自由遊び

※昼食の食事指導終了後は自由遊びをしながら送迎時間を待つ預かりの時間となり、トレーニングはありません。昼食後の早い時間のお迎え(送迎)をご希望の方は遠慮なくスタッフまでお知らせください。昼食後のお迎えを希望される方が多ければ、13:00からの集団懇談も検討していきますので、スタッフまでご相談ください。

お願い

お子様の発達や日々の生活についてのご相談を電話でお受けすることがありますが、お急ぎのご用件でなければ、なるべく15時以降にお願いします(15時まではスタッフが療育に入っているため)。

また、長時間のご相談については、直接お越しいただくか、土曜療育相談をご利用ください。施設に電話回線が1回線しかないため、「話し中で連絡がつかなかった」とお困りの声をいただくことがあります。ご迷惑をおかけして申し訳ありませんが、緊急連絡等が入る場合もありますので、ご協力のほど、お願いいたします。

裏面は、wakabaだより10号に引き続き『生まれてきてくれてありがとう～子どもに伝えたい、あなたのために～』学術集会からのコラム第2弾です。園の先生方からもご要望をいただき、連載しています。

東京都立小児総合医療センター副院長

児童精神科医 田中 哲先生の講演より

『肯定的な感情によって子どもの心を育てよう』

否定的な感情はひとりでも育つ

でも、肯定的な感情はひとりでは育たない

子どもの波長に合わせてくれる大人の存在があることが子どもの安心感につながります。子どもたちが自分らしさを安心して表現できるところが『居場所』となり、自己肯定感が育っていきます。また、多数派の子どもたちとは異なる部分を肯定できるようになるには、受け止める側の大人の側にも自尊心が必要となってきます。『違うところがいい』と思ってくれる人がいるというメッセージを受け取ることで、大人も自尊心がもつことができ、子どもの異なる部分を肯定的に受け入れられます。子どもの肯定的な感情も大人の肯定的な感情も1人では育たず、わかってくれる人、支えてくれる人が必要なのだ、というお話でした。私たち療育スタッフも支援者の一員として、子ども達や保護者様の気持ちを受け止められるような『お助けマン』になれるといいなと感じました。

東京大学名誉教授 汐見 稔幸先生のお話より

(保育所保育指針・幼稚園学習指導要領改訂の第一人者)

「子育て」とは『子別れ』の準備

『子別れ(子どもの自立)』のために「子育て」をするというのは大事な視点例として「おむつ」の話をされました。

～戦前は、早い時期からおむつを外していた。おしっこが出たことを言葉で告げられない子も言葉以外の伝える手段をもっていたし、養育者も言葉がなくても察知できていた。文明によって、人間が自然にもっていた能力が失われている。

欧米では、就学後も紙パンツが脱げない子が増えている。それは、機能的に外せないのではなくて、常に履き続けたことにより安心アイテムの一つとなり、不安から外せないのだという。中学生になっても不安解消から自分から紙パンツに履き替える子までいて、店頭には小学生や中学生用の紙パンツが並んでいるという。子どもにとって紙パンツが安心アイテムとなる前に養育者にとって紙パンツが「履いていればもれても大丈夫」という安心アイテムになっていなかったらどうか。これは『子別れ』という視点のない子育ての一例である～

子どもの自立のために突き放すことも大切

×冷たい突き放し ○子どもの成長を願う愛ある突き放し

～だからこそ、そこに『愛着』が必要なのです～